ひとつの火

新美南吉

青空文庫

わたしが子どもだったじぶん、わたしの家は、山のふもとの小さな村にありました。
わたしの家では、ちょうちんやろうそくを売っておりました。
ある晩のこと、ひとりのうしかいが、わたしの家でちょうちんとろうそくを買いました。
「ぼうや、すまないが、ろうそくに火をともしてくれ。」
と、うしかいがわたしにいいました。
わたしはまだマッチをすったことがありませんでした。
そこで、おっかなびっくり、マッチの棒のはしの方をもってすりました。すると、棒のさきに青い火がともりました。
わたしはその火をろうそくにうつしてやりました。
「や、ありがとう。」
といって、うしかいは、火のともったちょうちんを牛のよこはらのところにつるして、いってしまいました。
わたしはひとりになってから考えました。
——わたしのともしてやった火はどこまでゆくだろう。
あのうしかいは山の向こうの人だから、あの火も山をこえてゆくだろう。
山の中で、あのうしかいは、べつの村にゆくもうひとりの旅人にゆきあうかもしれない。

するとその旅人は、
「すみませんが、その火をちょっとかしてください。」
といって、うしかいの火をかりて、じぶんのちょうちんにうつすだろう。
そしてこの旅人は、よっぴて山道をあるいてゆくだろう。
すると、この旅人は、たいこやかねをもったおおぜいのひとびとにあうかもしれない。
その人たちは、
「わたしたちの村のひとりの子どもが、狐(きつね)にばかされて村にかえってきません。それでわたしたちはさがしているのです。すみませんが、ちょっとちょうちんの火をかしてください。」
といって、旅人から火をかり、みんなのちょうちんにつけるだろう。長いちょうちんやまるいちょうちんにつけるだろう。
そしてこの人たちは、かねやたいこをならして、やまや谷をさがしてゆくだろう。

わたしはいまでも、あのときわたしがうしかいのちょうちんにともしてやった火が、つぎからつぎへうつされて、どこかにともっているのではないか、とおもいます。

青空文庫情報

底本：「ごんぎつね　新美南吉童話作品集1」てのり文庫、大日本図書
　　1988（昭和63）年7月8日第1刷発行
底本の親本：「校定　新美南吉全集」大日本図書
入力：めいこ
校正：もりみつじゅんじ
2002年12月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ひとつの火

新美南吉

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/